ダーウィン『人間の由来』におけるリアリズムとユートピア論

入江重吉

はじめに

私は以前に、ダーウィンの人間論についていくつか考察を加えてきた[1]が、そこでの議論においては十分とは言えない論点が少なからずあった。例えば、善悪の問題、とくに悪の問題と進化についてのダーウィンの議論である。私はこれに関連する小論において、ダーウィン自身が悪の問題を十分に取り上げていないために、道徳ないし倫理の進化についての楽観的な見方がダーウィンにあることなどに触れておいた[2]。すなわち、原始社会の部族における集団内部での協力関係、忠誠心、同胞愛などが、ダーウィンにあっては、道徳性ないし倫理の進化として語られているが、ここにはあたかも美徳だけが発展したかのようである。しかし実際にはそうでなく、この美徳の発展は同時に悪徳の発展でもあった。つまり、集団内部での協力関係、忠誠心、同胞愛などは、まさに部族と部族の間の戦闘を通じて次第に強固なものになっていったのである。そうした集団内部での信頼・協力・相互扶助といった美徳は、他集団に対しては攻撃的な性質を持った。美徳はそのまま悪徳として

の威力を発揮するのである。

ダーウィンは『人間の由来』（一八七一年）の中で、理想主義的な議論を展開し、人間の社会進化における進歩を展望した。その場合、ダーウィンは、石器時代の小集団モラルの発展という形で道徳性の進歩を描き出している。しかし、小集団モラルをよく吟味してみると、そこにはネポティズム（縁者びいき）とゼノフォービア（よそ者嫌い）という二大要素があり、これらが小集団モラルのダブル・スタンダードを生み出していることが分かる。ダーウィンは〈道徳性の標準の高度化〉つまり社会的道徳的進歩について述べているが、それを指摘するだけでは不十分である。それと同時に、〈反道徳性の標準の高度化〉つまり進歩に逆行する事態も強調されねばならない。換言すれば、かりに人類史に進歩を認めるとしても、それは極めてパラドクスに満ちたものなのである。前述した小集団モラルの論理そのものを吟味すれば、ダーウィンは、生物進化の場合と同じく社会進化においても、進化は進歩の観念を含まないという結論に至るべきであった。しかし、そうした結論にダーウィンは至らなかった。おそらく、『人間の由来』のダーウィンは、当時の（ヴィクトリア朝時代の）進歩思想あるいは進歩というイデオロギーに制約されていたのかもしれない。そのために、ダーウィン本来の進化論的整合性を欠くことになったのではないか。(3)

以上に見たように、ダーウィンの著作『人間の由来』の中には、道徳ないし倫理の進化をめぐって、ダーウィン本来のリアリズムとともにユートピア論が見られる。さらに、男女の性差や人間本性にかかわる議論においても、ダーウィンにはリアリズムに徹した議論もあればユートピア的な理解も見られる。本稿で私は、そうした論点を中心にして、ダーウィンの著作『人間の由来』に内在する重要な議論とともに不首尾な議論をも批判的に取り上げることにしたい。

一　男女の性差

ダーウィンは『人間の由来』という著作において、人間の男女に見られる心的能力の相異に触れている。(4)

まず、男の特徴から見ておこう。ダーウィンによると、男は女より勇敢で、好戦的であり、しかも発明の才に恵まれている。女に比べて男のほうが身体は大きく、力が強く、広い肩幅を持ち、筋肉がよく発達し、身体の輪郭がごつごつしている。男は他の男たちにとっての競争相手である。男は争いを楽しみ、争いは野心をもたらし、野心はさらに利己主義へと容易に移っていく。この野心とか利己主義という性向は、男が生まれながらに持っている不幸な能力である。

これに対して、女は男よりずっと優しく、男ほど利己的でないということなど、心的傾向の点で男とは違う。女はその母性本能により、自分の幼子に対してこうした性質を勝れて発揮する。女はそうした性質をしばしば仲間に対しても及ぼす。女は直観力や、迅速な知覚の能力や、あるいは模倣の能力において、男より一段と際立っているということは、一般に認められている。しかし、これらの能力のうち少なくともあるものは、下等な人種の特徴でもある。したがって、過去の低い文明状態の特徴ということにもなる。

深い思考や理性や想像力を必要とする面においても、あるいはたんに感覚と手を必要とする面においても、あらゆることにおいて男のほうが女よりも高度な段階にまで達しうる。総じて、男の心的能力の平均は女のそれよりも高い。

半ば人間という状態の人間の祖先や、また未開人の間では、女の所有をめぐる男同士の争いが何世代もの間続いた。しかし、勝利を得るためには、たんに身体的な強さや体の大きさだけでは十分でなく、それに加えて

勇気やねばり強さ、断固とした活動力がなければならない。また、敵を首尾よく避けたり攻撃したり、野獣を捕らえたり、武器を作ったりするには、観察力や理性、発明の才あるいは想像力という、高度な心的能力の助けが必要である。これらの種々の能力は、こうして人生の男盛りのときに絶えず試練を受け、淘汰され、しかもその時期に使われたので、ますます強化されたのである。

男は女に比べて大きな体と強さ、勇気や好戦性と活動力を持っているが、これらの特性は原始時代にすでに獲得され、その後、主として、女を手に入れるために競争相手の男たちと争うことによって強められた、と結論してよいだろう。男のほうがはるかに旺盛な知性を持ち、発明の才に富んでいるのは、おそらく習性の遺伝的効果と結びついた自然淘汰によるものであろう。

ダーウィンは以上のように「典型化された男女の性差」について語っている。これに対しては、周知のように、フェミニストからの批判もあるが、しかし、ダーウィンの性差論を基本的に妥当であると見なす擁護論者の側でも、別の角度からのダーウィン批判が出されている。ここでは、キャロル（一九九五年）、アルンハート（一九九八年）、ヴケティッツ（二〇〇二年）の議論を中心に見ていくことにしたい。(5)

ダーウィンの指摘するように、まず、身体的特徴での男女差があり、このことと男女の心的能力の差異が関連している。男は勇敢で好戦的という性質を持つのに対して、女は母性本能を備えていて他者に優しく共感的という性質を持つ。もちろん例外もあり個人差もあるが、一般論としてはそのように言うことができる、というのがダーウィンの考えである。こうした性差は社会的・文化的に捏造されたものであるという批判もあるが、そうではない。例えば、後述するように、性差・性別役割を消去しようとしたイスラエルのキブツでの共同体教育が破綻したことからも、明らかである。ダーウィンの言うように、性差・性別役割は人類進化の中で、自然淘汰と、とりわけ性淘汰とを通じて形成されたのである。もちろん、それだからといって、原始時代以来

の性差・性別役割を金科玉条のものとしなければならないというわけではない。つまり、特定の時代によって誇張され増幅された性差・性別役割は、現代に相応しいかたちで修正されねばならないのである。しかし、性差・性別役割は文化に依存するものであり過去のそれは場合によっては完全に消去しうると見なすような文化相対主義の考え方は、キブツの例でも明らかなように支持されない。

男と女の性差を際立たせる社会的性質として、男の野心と闘争心、女の優しさと共感について考えてみよう。ダーウィンによれば、男の野心と闘争心は利己主義に向かうのに対して、女の優しさと共感は博愛主義・利他主義に向かう。こうした社会的性質が形成された原始社会の状況を想起してみよう。男は血縁小集団を守るために外敵と戦い、女を獲得するために仲間と闘争してきたが、女は女の側で、自分と子どもの生存・安全を確保するために資源を提供してくれるような、外敵と戦い仲間との闘争に勝ち抜いてきた男を求めた。男女の社会的性質は、キャロル（一九九五年）、アルンハート（一九九八年）が指摘するように、相補的で相互依存的なものである。(6)

キャロルは、男女の心理学的機構には明白な差異がある――これはダーウィンのリアリズムである――けれども、一方の心理学的性質を他方のそれから孤立させるのは間違いである、と指摘する。と言うのも、ダーウィンは、女の慈しみと共感という規範を普遍化して、この規範に男の利己主義的な規範を従属させようとしているからである。具体的に言うと、ダーウィンは、人類の道徳的進歩はとりわけ女の共感能力が普遍化されたことによる、と考えているということである。これはダーウィンのユートピア論である。

はたして、女の優しさと共感はいわば無制約なものであろうか。母性本能といわれるものを考えてみよう。それは例えば、見ず知らずの子どもに対してもつねに自ずから出てくるというものではなく、とりわけ自分のあるいは血縁関係にある子どもに対して自然に出てくる本能であろう。共感というものも、それが自然な共感

であれば、集団の帰属意識によって強く制約されている。おそらくダーウィンは、身内に限定された狭い意味での共感の制約を取り除くことは可能だと考えたのであろう。共感とは、他人の幸不幸や快苦をみずからが共有する心の働きであるとするならば、そうした心の仕組みが普遍化すると、他人との協力・協調も促進されるということになる。共感の普遍化というのは、自然発生的な血縁小集団の制約を打破するということであるから、まさにそれは文化(理性能力や教育の力)によってのみ可能である。例えばダーウィンは次のように言う。

文明が進み、小部族が結合して、より大きな共同体になるにつれて、最も単純な理性が各個人に対して、その社会性本能と共感を、同じ国のすべての人々に、たとえ個人的には知らない人にでも、拡げるべきだと教えるだろう。いったんこの段階に達すると、その共感をあらゆる国や民族に属する人々に拡げるのを妨げるのは、人為的な障害だけである。……／人間という枠を越えての共感、すなわち、下等な動物への博愛は、最も遅く獲得された道徳の一つであると思われる。(7)

しかしながら、他方でダーウィンは、動物と人間に共通する社会性本能と共感は同じ種のすべての個体に拡張されることはないとも述べている。すなわち、

動物は社会性本能によって、仲間たちの社会に喜びを感じ、仲間にある程度共感を寄せたり、彼らに役立つ様々な骨折りをしたりする。……しかし、これらの感情や骨折りは、決して同じ種のすべての個体に拡張されるのではなく、ただ同じ共同体に属する個体にのみ及ぼされるのである。(8)

すべての動物において、共感は同じ共同体の仲間だけに向けられ、それゆえ、よく知っていて多少とも愛

情を感じている仲間に向けられるのであって、同じ種のすべての個体に向けられるのではない[9]……。

社会性本能は、決して同じ種のすべての個体に拡張されるものではない[10]。

社会性本能を賦与されている動物は、互いに仲間になることを喜び、仲間同士で危険を知らせあい、いろいろなやり方で守りあい助けあう。こういう本能は、その種の全個体に拡張されるものではなく、同じ共同体に属している個体だけに及ぼされる[11]。

もともと共感というのは石器時代の血縁共同体（小集団）の中で芽生え、共同体そのものの絆を強化したものであろう。数百万年も続いた石器時代の中で形成された心の仕組みが、せいぜい一万年しか経っていない文明史において劇的に変化するということがありうるだろうか。そういうことは不可能だろう。なぜなら、心の仕組みの詳細はまだ解明されていないとしても、それが脳・中枢神経系と密接な関連にあることはよく知られているが、当の脳・中枢神経系の構造が一万年の間にまったく変化していないからである。

大脳新皮質など新脳の働きに対応する人類の知性・理性は著しく発達したために、科学技術の現在に至る天文学的とも言える進歩があった。つまり、人類の知性・理性は石器時代の制約を乗り越える段階にまで到達したと言うことができるだろう。これに対して、古脳に対応する感情・情動はいわば旧態依然としたままである。人々は相変わらずヘビやクモを恐れ暗闇の中で不安を募らせる。また、どれほど優れた知性を備えた人でも激情に襲われ欲望に翻弄されることがあるし、誰であれ喜怒哀楽の感情を自在に制御することは並大抵のことではないのである。つまり、人類の感情は依然として石器時代とも共通する心的機構を備えていると言えよう[12]。いま問題にしている共感・同情という心の仕組みについても、そのことは当てはまるのである。

それゆえ、人類の共感能力が血縁小集団の枠を越えて働くようになったというダーウィンの議論はあまりに

楽観的なユートピア論であると言うことができる。むしろ、共感の範囲は血縁小集団の枠を越えることはないとするダーウィンのもう一つの考え方こそ、リアリズムに根ざしたものなのである。

ところで、男女の性差に関して、前述したダーウィンの議論を改めて取り上げてみよう。ダーウィンによれば、男の野心と闘争心は利己主義に向かうのに対して、女の優しさと共感は博愛主義・利他主義に向かう、ということであった。しかし、なぜ男の野心と闘争心は利己主義のみに結びつくと言えるのか。男は確かに利己心を発揮して自分と家族を守るために仲間と戦う。だが、男は共同体を守るために外敵と戦う場合、仲間と協力することはないのか。そもそも仲間同士の協力・協調なくして外敵との戦いに勝利することは不可能であろう。また女の優しさと共感についても、はたしてそれが博愛主義と利他主義に向かうと言うことができるだろうか。女の優しさと言っても、その優しさは男女が協力して家族生活を営む中で発揮されるものであり、女の共感も同じ血縁共同体の紐帯となるような共感であろう。家族や共同体の中で培われてきた優しさと共感であれば、それは当然ながら家族や共同体を離れた抽象的なものではあり得ない。つまり、女の優しさと共感と言えども、決して利己主義とは無縁ではないのである。それゆえ、男は利己的であるのに対して女は利他的である、というダーウィンの二分法的な性差論は正しくないということである。キャロル（一九九五）の表現を用いて言えば、男女の心理学的機構は明白な差異を示すということは正しいけれども、一方の心理学的性質を他方のそれから孤立させるのは間違いなのである。(13)

二　母親と子ども

さきほど、男は利己的であるのに対して女は利他的である、というダーウィンの二分法的な性差論を批判し

たが、ここで、誤解のないように付け加えておきたい。じつは、ダーウィンの二分法的な性差論そのものが間違いだということではないのである。ダーウィンの指摘する「男の野心と闘争心、女の優しさと共感」という二分法は妥当である。問題なのは、そのことから一方は利己的、他方は利他的という結論を導き出す点にある。それは根拠のない議論であった。しかし、ダーウィンの性差論そのものは、例外はあるとしても男女を全体として見れば、現在でも通用する議論なのである。その一つの例証として、母親の子どもに対する愛情、いわゆる母性本能を取り上げることにしたい。

かつて一九四九年に、人類学者のジョージ・マードックは二五〇の社会に対する比較文化的調査を行い、核家族は人間社会の基本単位であり、極めて重要な機能――すなわち性的、経済的、生殖的および教育的機能――を有する、と述べた。これに対して一九五四年、人類学者のメルフォード・スピロが、イスラエルのキブツのケースから核家族は普遍的ではないと批判した。(14)

キブツ（kibbutz）とは、ヘブライ語で〈集団〉を意味し、イスラエル建国運動において形成された独特の農村形態をいう。それは、構成員間の完全な平等、相互責任、自己労働、個人所有の否定、生産・消費の共同性の原則に基づいて組織された共同体で、ふつう三〇〇～五〇〇人程度の規模で、なかには一、〇〇〇人を超すものもある。村の経営方針は総会で決定されるが、教育・文化活動、住宅問題、各個人の作業分担など日常の運営管理は、運営委員会で処理される。一九〇九年ティベリアス（ガリラヤ）湖畔に建設されたのが最初で、八〇年現在、二五九村（十一万人）を数え、輸出農産物の三分の二を生産している。キブツは社会主義的諸原則に基づいて、パレスティナにユダヤ人の民族郷土を建設することを目的とし、そのために、食糧の安定供給、防衛活動、移民の受け入れの面で先端的役割を果たすとともに、ユダヤ人の入植運動、シオニスト運動の中核的担い手であった。(15)

しかし一九七九年に、キブツは変化したとスピロは報告した。[16] 彼が一九五一年にキブツを研究し始めたとき、彼は、人間本性は文化的に構成されるという社会科学者の共通の仮定を受け容れていた。彼が一九七五年にキブツに戻ったとき、彼は、人間本性における社会経済的革命が生活のあらゆる領域で成功していたことがわかったが、ただ一つ例外があった。何年もの間、キブツの女性たちは、母親が自分の子どもたちの世話をするという伝統的な家族の役割に戻ることを要求していた。かつて文化相対主義を受容していたスピロも、いまや、生活の一つの領域――すなわち、母親の子どもに対する愛着と、この愛着から出てくる性別役割――においては、自然が文化に勝利した、と確信するに至ったのである。

キブツでは、その創設以来、性的平等を確保するために女性は伝統的な役割から解放された。生後二週間から六週間経つと、子どもたちは公共の保育所に移され、その後、すべての世話と教育が公共的に行われる。子どもたちは訓練を受けた看護婦と教師の世話のもとで寄宿舎生活をする。そのため、子どもたちは両親のアパートで寝泊まりすることは許されなかった。[17]

キブツでは、〈子どもの世話という重荷〉は〈女性の生物学的悲劇〉と呼ばれるものの根源であると考えられた。もし女性が男性と同じ生活をするとしたら、女性は〈生物学的悲劇〉から解放されるに違いない、と思われた。子どもの公共的な世話は最初の数年間はうまく行っていたようだが、しだいに母親たちは子どもと接触する多くの時間を要求するようになった。たいていのキブツでは、両親と子どもたちの特別な絆が再び現れた。[18]

公共的な規範からの当初は僅かであった逸脱は、しだいに家族的な自律の復活にまで高まった。今ではたいていのキブツで、親子の愛着に中心を置く私的な家族が、子どもの世話にとっての基本的な社会単位になった。もっとも、キブツの社会的、経済的および政治的活動は公共的なままにとどまる。

家族的な自律を回復したいという要求は、キブツ生まれの生粋のイスラエル人女性たちによるものだった。彼女たちは、母親を子どもから引き離すのは〈自然に反する〉と主張した。これは驚くべきことだった。なぜなら、彼女たちは、母性と性差という伝統的概念を消去するように工夫された教育を受けて育ったからである。[19]

性差を消去するというキブツでの教育は、次のようなものであった。男子と女子は同じトイレを使用し、一つのシャワールームを用い、同じ寝室で眠った。そうした状況では、子どもたちは性的羞恥心を持たずに成長するだろうと想定されたのである。このことは、子どもたちが思春期になるまではうまく行った。しかし、思春期を迎えた女子は、高校での浴室と寝室を男女別にするよう要求した。性的な慎み深さの意識が社会環境に反して主張されたのであり、この意識は自然なものであって、たんに文化的なものではないということなのである。要するに、キブツでの教えに反して、子どもたちは性差を示した。[20]

このキブツの例でもわかるように、男女の性差、親と子どもの絆、[21]母親による子どもの世話は自然なものであり、それらは人間の本性（人間的自然）に根ざしている。これに対しては、キブツでの核家族の復活は、私的な家族と子どもに対する母親の世話を好む文化的偏見による、という反論もあるようだが、そうした〈文化的偏見〉を排除しようとする文化的な努力がなされたにもかかわらず、排除され得なかったことの意味を考えるべきであろう。

三　人間の本性

人間の本性についての二つの典型的な説は、いわゆる性善説と性悪説である。一方は、もともと人間は善良であると考えるのに対して、他方は逆に、人間は生まれつき邪悪であると見なす。しかし、いずれも一面的で

あって、人間は善良であるとも邪悪であるとも決めつけることはできない。例えば、同じ人間が、ある人間ないし集団との関係では善良な行動を示すのに対して、他の人間ないし集団との関係では邪悪な行動をとることがある。

人間の本性（human nature）というのは、人間にとって自然な性質であり、自然的欲求として人間に備わっているものである、と言うことができる。そうした自然的欲求として、アルンハート（一九九八）は二〇種類のものを挙げている。すなわち、(1)完全な生活、(2)両親による子どもの世話、(3)性的な同一性、(4)性的な衝動、(5)家族的な絆、(6)友情、(7)社会的地位、(8)相互性としての正義、(9)政治的規則、(10)戦争、(11)健康、(12)美、(13)財産、(14)会話、(15)実際的な習慣、(16)実際的な推論、(17)実際的な工芸、(18)美的な快楽、(19)宗教的な理解、(20)知的な理解、である。[22] 以上のうちここでは、ダーウィンのリアリズムとユートピア論との関連で、いくつかを取り上げ説明を加えておこう。

第一に、(2)両親による子どもの世話と(5)家族的な絆について。人間は一般に子どもの世話、特別な絆のある子どもの世話を望むし、家族で生活しようと欲する。母と子の絆、親族関係は最も重要な社会関係である。ダーウィンのリアリズムはこのことを確認している。ちなみに、家族生活の成立は人間言語の発生と密接に関連している。というのも、原始人類の生活は家族など血縁集団を単位として営まれており、その糧は基本的に狩猟と採集に依存していたが、獲物の分配、協同作業には言葉を介した意思伝達が欠かせない。家族内での、また家族間での社会的結合・交流の成立は、同時に人間言語の発生と同調しているのである。

第二に、(3)性的な同一性と(4)性的な衝動について。これらは男女の性差にかかわる。性同一性障害者は別として、一般に男または女はそれぞれの性的な自己同一性を欲する。男は高い地位をめざして競争するのに対して、女は母性本能を発揮するのが一般的である。しかしもちろん、例外もある。ともかく、文化的・社会的な

意味での性別の偏見（ジェンダーバイアス）は取り除かれねばならないとしても、生物学的な意味での性差は承認されねばならない。ダーウィンはこの点でもリアリズムの立場から性差を明確に認める。ところで、かりにジェンダーフリーという言葉で性差そのものを退けるとしたら、それは間違った対応であると言わざるを得ないだろう。

第三に、(9)政治的規則と(10)戦争について。アリストテレスの言うように、人間は政治的動物であり、何らかの集団への帰属意識を持ち、必要な場合には政治的組織を欲する。人間は、他の集団との抗争において自分の集団を発展させるように思えるときは、戦争を欲する。関連することだが、人類はハト派であるともタカ派であるとも言うことはできない。人は総じて、ある場合はハト派として平和を求め、他の場合はタカ派として他者（他集団）との抗争ないし戦争に至る。こうした政治的組織と戦争の問題を、ダーウィンはある意味で肯定している。すなわち、部族間の戦争を通じて、より強固な組織を持つ部族が生き残るということである。しかし他方で、ダーウィンはユートピア論的な捉え方もしている。例えばそのことは、文明の発展の中で〈道徳性の標準の高度化〉が成し遂げられてきたと見るダーウィンの進歩史観において窺われる。

以上に見た家族的な絆、性的な同一性および政治的な行動によって、私たちは、昔も今も変わらぬ人間本性のリアルな内実を捉えることができるだろう。

もちろんその他にも、例えばアルンハートも右の(19)で触れているが、宗教的な心の傾向というものが古今東西の人類には普遍的である。これに関連して、ウィルソン（一九七八年）は次のように言う。

宗教的信念に関する心の諸過程――個人および集団のアイデンティティの聖化、カリスマ的指導者への注目、神話形成の傾向など――は、遺伝的にプログラムされた諸傾向の現れであり、脳の神経装置には、これ

らの諸傾向を生み出すのに十分な諸要素が、数千世代にわたる遺伝的進化によって組み込まれている。[23]

しかし、人間の本性にとってそれらは不可欠なものと言えるだろうか。例えば、家族的な絆が失われた場合や、不幸にして家族的な絆そのものに恵まれない場合、あるいは性的な同一性に障害をきたしている場合、あるいは政治的な行動に何ら関心を持たない場合、さらに宗教心をまったく欠いている場合などが人によってはありうるだろう。そうしたケースにおいて、人間本性というものをどう考えたらよいのか。

およそ人間の本性に不可欠と言えるものは生存本能、生存への欲求ではなかろうか。アルンハートの挙げる自然的欲求のうち、(1)完全な生活、(11)健康、(12)美、(13)財産、(18)美的な快楽などはまさに人間に相応しい生存のあり方にかかわるものであり、これが人間の本性の中でも最も根源的なものであろう。それは古典的には、ホッブズが〈自己保存欲〉と名づけたもの、ヒュームが〈利己心ないし所有欲〉と呼んだもの、あるいはまた、ニーチェが〈力への意志〉と呼んだものとも関連する。もちろんダーウィン流に言えば、生存本能は人間のみに特有なものではなく、およそ動物に備わる自然な性質（本性）なのである。

そしてさらに、もう一つ、社会性動物と人間に自然な性質（本性）は愛情や同情・共感という心の働きである。ダーウィンは次のように言う。

> 集団で生活している動物は、特別の熱情や欲求の刺激がなくても、仲間に対するある程度の愛情や共感を、つねに感じている。彼らは、長く仲間から隔離されると不幸せになり、仲間といれば幸せである。これらはどれも、私たち自身に当てはまる。このような感情を一つも持ち合わせていない人間は、不自然な怪物（unnatural monster）だろう。[24]

ここで、ダーウィンが〈不自然な怪物〉とまで断言したことの意味を深く考えるべきだろう。すなわち、仲間に対する愛情や共感を持たない人間とは、ヒューム的に言えば、モラルセンスを持たない人間である。そうした人間は人間として不自然であり、人間として逸脱した存在なのである。そうした人間を私たちは精神病質者（サイコパス）と名づけることができる。

サイコパスは人間が社会生活を営む上で最も重要なセンス、モラルセンスを欠いている。それは道徳感覚と訳されるが、ひろく社会感情と言い換えてもよいだろう。サイコパスは社会的な情感や同情・共感などの心の働きをまったく持たない。そのため例えば、彼らは他人の痛みを感じることができない。アルンハートによれば、サイコパスは、

> 残忍な社会的略奪者であり、罪悪感や後悔の念もなく、他人を魔法にかけ、操作し、欺き、攻撃し、ときには殺すのである。……利己的で欺瞞的、貪欲で衝動的なので、彼らは完全に反社会的な動物であり、社会的規範を考慮することなく、どんな瞬間にも、彼らを興奮させる気まぐれな快楽であれば何でも休みなく求めてやまないのである。[25]

以上のように、サイコパスは愛情や共感、罪悪感や後悔の念、羞恥心などの社会感情をまったく備えていない、つまり、人間としての自然な心を持たないのである。もちろん、サイコパスも何らかの感情を持っている。しかし、彼らは生存に必要な原始的感情を持つだけで、社会的規範を意識した正常（ノーマル）な感情は持たない。ところが、サイコパスは知性ないし理性の面ではノーマルであり、なかにはアメリカの連続殺人犯テッド・バンディのように法律家を目指したエリートもいる。要するに、サイコパスの反道徳性・反社会性は理性

の欠如によるのではなく、感情の貧困によるということである。[26]

サイコパスの存在から、私たちは人間の本性に関する重要な示唆を得ることができる。すなわち、人間の本性にとって最も大切なもの、最も根本をなすものは何かということである。それは、家族的な絆か、性的な同一性か、政治的な行動か、宗教的な心の傾向か、生存本能か、社会感情か、あるいは、プラトン以来の哲学者によって強調される理性能力なのか。じつは、サイコパスはそれらの一切を持ちうるし、社会感情以外のすべてを持つことができるが、ただ社会感情ないしモラルセンスだけは持たない。逆に言えば、まさにこうした社会感情こそ人間の本性にとって不可欠なものであるということなのである。そして、この社会感情ないしモラルセンスを社会性動物からの人間の進化のレベルで引き出したのが、まさにダーウィンに他ならない。ここに私たちは、人間本性に関するダーウィンのリアルな洞察を確認することができるであろう。

しかしながら、ダーウィンは進歩思想の立場から、社会感情ないしモラルセンスの普遍化を考えた。そうしたいわばユートピア的な普遍化の行き着く先は人類愛・博愛に満ちた社会、戦争のない世界ということになるのではなかろうか。また、私はさきほど、サイコパス的な存在を「不自然な怪物」と見なすダーウィンの議論を肯定的に評価したが、問題点も指摘しておかねばならないだろう。というのは、もし「不自然な怪物」というのであれば、それは自然淘汰によって排除されるものではないのか、ということである。

およそどの社会においても、生存と繁殖において協力行動をとるほうが有利であるとしたら協力戦略が進化する。もしも相手が協力したのにお返しをしないという欺瞞戦略を採用するとしたら、そうした詐欺師はしっぺ返しを受け、窮境に陥っても助けが得られない。それゆえ、たいていの人々は協力戦略を採ることになろう。しかし、協力が広く行き渡っている集団においては、少数の個人が、たいていの人々の協力行動を収奪するように欺瞞戦略を採用することは有利であろう。サイコパスも、相手の信頼・協力を操作して欺瞞にかけ生命と

財産を略奪するという意味で、欺瞞戦略を用いる。そうした欺瞞戦略が一時的にせよ成功を収める限りで、それは進化の中で排除されることはなかったのである。

要するに、たいての人々はモラルセンスを備え社会感情を発達させたが、ごく少数の人々はサイコパス的な気質を備え反道徳的・反社会的行動をとることになったのであり、それは何ら不自然なものではないということである。サイコパスは確かに〈道徳的異邦人〉[27]とも言うべき存在であり、怪物と言っても過言ではないほどだが、その存在が説明しがたいほどに「不自然な怪物」とまでは言えないのではないか。

おわりに

ときとして、ダーウィンには人種差別や女性蔑視の思想が含まれる、という非難が浴びせられることがある。まず、人種差別という非難について言えば、ダーウィンが若いときから奴隷制度と人種差別に対する強い嫌悪感と批判意識を有していたことは、よく知られていることであって、そうした嫌疑は当たらない。『人間の由来』の中でダーウィンは言う、「奴隷制度は、古代においてはある意味では有利であったとはいえ、大きな罪悪である」[28]と。トール（二〇〇一年）によれば、『人間の由来』の中でダーウィンは、文明人と接触し征服された未開人の劣等性を記述しているが、この劣等性には永続性はまったくないし、その原因は物理的環境と歴史にあると考えていた[29]。しかし、進歩思想の持ち主であったダーウィンは、未開社会の人々が啓蒙されることを是としていたことは疑いない。だが、ヨーロッパ文明の普及は決して博愛に基づくものではなく、むしろ植民地支配と奴隷制度の拡大をもたらしたにすぎなかった。こうした歴史のパラドクスはすでに一八世紀のカントが炯眼に洞察していたことであったが[30]、これに対して、ダーウィンのヒューマニズムにはそうした洞察は

なく、ユートピア論の域を超えるものではなかったのである。

また、ダーウィンは、社会における女性の地位の低さについても記述しているが、彼は女性をいつまでも低い地位にとどまらせておくのではなく、教育の力でそうした状態に終止符を打つことができると考えていた。もっとも、ダーウィンは、男の心的能力の平均は女のそれよりも高いと述べており、この点は明らかに性差別的な記述となっている。[31] ただし、ダーウィンに好意的に解釈することも可能である。例えばそれは、歴史的・文化的な事実として、男は女よりも能力を発揮する分野での活躍が多いということであって、男は生まれつき女よりも高い能力を持っているという意味ではない、のだと。

しかし、解釈の余地なく問題となると思われるダーウィンの記述がある。それは、心身にひどい欠陥のある者や貧困に窮する者は結婚を差し控えるべきだという提言をなしているくだりである。その理由として、ダーウィンは明らかに優生学的な説明を与えている。[32] これと関連するが、自然淘汰と生存闘争を通じての生物進化の理論を、人間の社会進化にもそのまま当てはめようとする一節が『人間の由来』の中にある。すなわちダーウィンは、人口の自然増加率が高いのは害があるけれども、人口増加の圧力があって進化が起こったということからすれば、この自然増加率を極端に下げてはならない、と述べているのである。もちろん、ダーウィンの社会進化論は全体として見れば、決して社会ダーウィニズムに組みするものでないことは言うまでもない。

他方でダーウィンは、文明社会の発展にともない社会福祉が充実すること、つまり文明が自然淘汰の働きを抑制するということに触れ、次のように言う、「虚弱な者が生き残り、その子どもを残していくということの疑いもなく悪い結果に、われわれは耐えなければならない」[33]と。つまり、たとえ優生学的な社会政策が望ましいとしても、倫理的にはそうした政策を支持すべきではないということだろう。というのも、人間の社会進化はやはり生物進化とは異なるからである。ダーウィンは理想主義の立場から人間の社会進化を捉えて、次のよ

うに言う。すなわち、

人間の道徳的資質が現在の標準にまで達したのは、部分的には、理性が発達し、その結果として正しい世論が喚起されたからであるが、しかしとくに、習慣や、模範や、教化や、反省のおかげで、共感というものがもっと優しくなり、かつ広く普及したことによる。[34]

さて、本稿で私は、ダーウィン『人間の由来』の中に混在するリアリズムとユートピア論について検討してきたが、これを端的に示すものとして、格調の高い筆致でしたためられた同書の結びのパラグラフを引用することにしたい。

人間はあらゆる高尚な資質をもち、いかに品性下劣なものにも共感を寄せ、人間だけにとどまらずいかに下等な生き物にも慈悲心を及ぼし、神のような知性をもって太陽系の運行や構成まで見通すなど、このような崇高な力を身につけているのだが、それでもなお、人間の体の仕組みの中には消し去ることのできない刻印が刻まれていて、それが人間の下等な起源を示しているということを認めなければならない、と私には思われるのである。[35]

最後に、『人間の由来』という著作に混在するダーウィンのリアリズムとユートピア論をまとめてみよう。人間は下等な生物に由来するもので、すべての人間は共通の祖先から進化して現在に至っているのであるから、人間の心は相互に似通っている、具体的に言えば、石器時代に人間の心の原型はすでに出来上がったとい

う人間観――ここにダーウィンのリアリズムがある。しかし、いわゆる未開人ないし野蛮人は道徳的に劣っているのに対して、文明人は普遍的な共感能力を持ち高い道徳性の水準に到達したという進歩史観――これはダーウィンのユートピア的な主張であろう。

注

(1) 入江重吉『ダーウィニズムの人間論』昭和堂、二〇〇〇年、参照。
(2) 入江重吉「悪の問題と進化」、『松山大学論集』一四―一、二〇〇二年、所収、参照。
(3) 入江重吉「ダーウィンの進化論と進歩思想」、『松山大学論集』一五―四、二〇〇三年、所収、参照。
(4) Darwin, Charles : The Descent of Man, 1871. In : Barrett/Freeman (eds.) : The Works of Charles Darwin, Vol. 22, 1989, pp. 579―580, pp. 585―587, p. 629.
(5) Cf. Carroll, Joseph : Evolution and Literary Theory, 1995 ; Arnhart, Larry : Darwinian Natural Right, 1998 ; Wuketits, Franz M. : Der Affe in uns, 2002.
(6) Cf. Carroll, ibid., pp. 358―359 ; Arnhart, ibid., p. 149.
(7) Darwin, ibid., p. 127. なお、共感の普遍化というダーウィンのこうした議論について、ヴケティツは次のように言う。すなわち、あまり知られていないことだが、ダーウィンは、シュヴァイツァーとあまり隔たっていないような思考態度を発展させた。われわれ人間は他の種に対して無制限に自らの共感を拡張することができる、という結論に至るようなあらゆる考察は、われわれ人間という種もたんに生存のために〈考案されて〉いるのであって、決して他の生物を保護し世話するためにあるのではない、という単純な事実を無視している。われわれが満ち足りており、他の種がわれわれを脅かしたり困らせたりしない限りで、われわれは自らの共感を他の種に対しても拡張することができるのである。Cf. Wuketits, Franz M. : Der Affe in uns, 2002, SS. 82―85.
(8) Darwin, Charles : The Descent of Man, 1871. In : Barrett / Freeman (eds.) : The Works of Charles Darwin, Vol. 21, 1989, p. 102.
(9) Darwin, ibid., p. 110.
(10) Darwin, ibid., p. 113.
(11) Darwin, Charles : The Descent of Man, 1871. In : Barrett / Freeman (eds.) : The Works of Charles Darwin, Vol. 22, 1989, p. 635.

(12) 長谷川寿一「こころも進化する」(『科学』六七巻四号、一九九七年)、長谷川寿一「心の進化」(『新たな人間の発見』岩波書店、一九九七年)、参照。

(13) Cf. Carroll, Joseph : Evolution and Literary Theory, 1995, p. 357.

(14) Cf. Arnhart, Larry : Darwinian Natural Right, 1998, p. 96.

(15) 世界大百科事典、平凡社、二〇〇〇年、参照。

(16) Cf. Arnhart, Larry : Darwinian Natural Right, 1998, p. 96.

(17) Cf. Arnhart, ibid., p. 97.

(18) Cf. Arnhart, ibid., p. 98.

(19) Cf. Arnhart, ibid.

(20) キングズレー・ブラウン(Browne, Kingsley)『女より男の給料が高いわけ』(竹内久美子訳、新潮社、二〇〇三年)も参照。

(21) アルンハートは、親と子どもの絆に関して四つのレベルの説明を与えている。第一に、機能的説明である。すなわち、親の世話が持つ機能は、そうした世話がなければ生存して成熟することのない子どもを保護し養育することにある。親子の絆は、人間の生存と繁殖成功に役立つものとして自然淘汰により有利になった。第二に、系統発生的説明である。すなわち、親の世話は、子どもに対する世話の利益が親の費用を上回るときに起こる傾向がある。親の世話は、人間が他の霊長類や哺乳類と共有する進化史の中から出てきた。第三に、発達的原因による説明である。すなわち、親の世話は自然淘汰によって形作られた自然な適応であるけれども、親子の絆は、子どもが母親、父親、兄弟姉妹や他の親族に囲まれているという、人間の進化史に典型的な環境に類似した社会環境の中で学習されねばならない。第四に、直接的原因による説明である。すなわち、子どもの世話への欲求は、あらゆる自然な欲求と同じく、人間の身体のホルモン・神経系に根ざしている。オキシトシンによって、メスによる子どもの世話やつがい形成が促進される。他方、バソプレシンによって、オスによる親としての世話やつがい形成が促進される。Cf. Arnhart, Larry : Darwinian Natural Right, 1998, pp. 103−114.

(22) Cf. Arnhart, ibid., pp. 31−36.

(23) Wilson, E. O. : On Human Nature, Harvard UP, 1978, p. 206.

(24) Darwin, Charles : The Descent of Man, 1871. In : Barrett / Freeman (eds.) : The Works of Charles Darwin, Vol. 21, 1989, p. 116.

(25) Arnhart, Larry : Darwinian Natural Right, 1998, p. 211.

(26) Cf. Arnhart, ibid., pp. 226−227.

(27) Arnhart, ibid., p. 227.

(28) Darwin, Charles : The Descent of Man, 1871. In : Barrett / Freeman (eds.) : The Works of Charles Darwin, Vol. 21, 1989, p. 121.

(29) トール (Tort, Patrick)『ダーウィン』平山廉監修、創元社、二〇〇一年、一四七―一四八頁、参照。

(30) カント『永遠平和の為に』高坂正顕訳、岩波書店、一九四九年［一七九五年］、参照。

(31) Darwin, Charles : The Descent of Man, 1871. In : Barrett / Freeman (eds.) : The Works of Charles Darwin, Vol. 22, 1989, p. 587.

(32) Darwin, ibid., p. 643.

(33) Darwin, Charles : The Descent of Man, 1871. In : Barrett / Freeman (eds.) : The Works of Charles Darwin, Vol. 21, 1989, p. 139.

(34) Darwin, Charles : The Descent of Man, 1871. In : Barrett / Freeman (eds.) : The Works of Charles Darwin, Vol. 22, 1989, p. 637.

(35) Darwin, ibid., p. 644.